

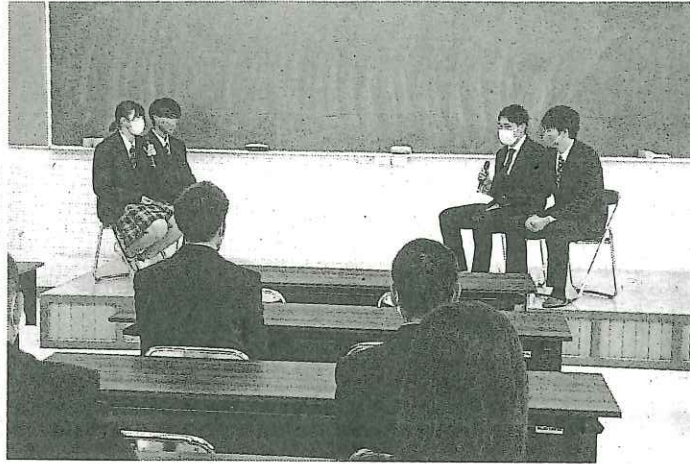
◆OB大学生と「進路」座談会

OB大学生と「進路」座談会

産大附属高

産大附属高(藤井泰昭校長)で9日、「大学生と高校生の座談会」が開かれた。同校卒業生で、新潟産大4年生2人が後輩たちと進路や学生生活などをテーマに語り合った。

高大連携プログラムの一環。これまでに海岸清掃活動や韓国語講座などを行ってきた。座談会には進路決定を控える2年生125人が参加。卒業生の水沢風雅



OBの新潟産大生との座談会＝産大附属高

さんと山口巧喜さんは卒業以来の母校訪問。高校時代を振り返り、大学生活、就職活動での公務員試験合格などを語った。

在校生の村山瑛充君と藤

巻彩羽さんが「高校のときはどんなことを考えていたか」「いつごろ進路を決めたのか」「新潟産大のいいところは」などと質問。大学生2人は「高校のときは

勉強と部活動が忙しくて、自分の将来を考える時間はあまりなかった」「大学生は4年間にいろいろな知見を広めることができ、将来のこともじっくり考えられる」などと話した。  
村山君は「進学か就職かまだ決めていないが、一人暮らしは考えている。今日の座談会を参考にしたい」、藤巻さんは「2人は大学生活を楽しんでいることが伝わってきた。大学進学に向けて頑張りたい」と話した。

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

学生による地域への提言

「新潟産大生による」  
地域に学び  
地域をおこす  
ー実践活動レポートー

学生による  
地域への提言

新潟産業大学では今年も学園祭が行われた。コロナ禍で昨年に引き続き入場者を学内関係者のみに限定しての開催となったが、当日はさまざまなイベントが企画された。

このうちの一つに「私の主張」というスピーチコンテストがある。本イベントの趣旨は学生が日常生活の中で感じている

こと社会への提言などを自分の言葉で発表すること、自分の考えを正しく伝える力を養うことを目的としている。

参加者の一人、本学の女子水球部に所属している田中真由さんは「地域社会と未来への希望」水球のまち柏崎」というテーマで発表。水球の活動を通して、競技を応援してくれる柏崎地域のの方々との深いつながりを感じていること、将来はスポーツを通じて柏崎市を活性化させた

いという思いを話してくれた。

発表を終えた田中さんは「自分の考えを心の中でとどめておくだけでは何も始まらないと思い、今回参加しました。人前で発表をしたことで、私自身が発信源となり、水球で柏崎市にさらに光を当てる活動にチャレンジしたい気持ちが一層強くなりました。自分の考えを実現出来るよう、発信する活動を続けていきたいと思います」と充実した表情で話した。

蓮池薫学生委員長は「柏崎を水球のまちとして全国に知ってもらうには水球選手の活躍とともに、地域とのつながりを深め、それを発信してい

くこの大切さを今回認識させてくれた。田中さんのような若者がぜひ、この柏崎を輝かせていてほしいです」と発表を振り返った。

地域に根付いた活動を続ける産大生の発信の場をこれからもつくってきたい。  
↓  
(同大学地域連携センター)



◆北信越大学サッカーL 新潟産大が1部昇格 無敗で圧倒「定着目指す」

# 北信越大学サッカーL 新潟産大が1部昇格 無敗で圧倒「定着目指す」

北信越大学サッカーリーグ2部の今季日程が終了し、新潟産大が無敗で1部昇格を決めた。近年、産大は1部と2部を行き来する状況が続いているが、来季に向け「1部への定着を目指し、準備していきたい」



北信越大学サッカーリーグで1部昇格を決めた新潟産大(チーム提供)

と見据えている。

今季、2部には産大を含め9チームが参戦。リーグ戦は4月下旬から始まり、総当たり戦後に上位4チームによるプレーオフが行われた。産大は第1節から危なげなく勝ち点を積み重ね

ね、7勝1分だけでプレーオフへ進出。富山大、新潟大、福井工大とのプレーオフでも全勝し、力の差を見せつけた。

リーグ戦を通じ、18点を挙げて得点王に輝いた壬生大空海選手(2年)は「得点でチームの昇格に貢献できて良かった。1部はさらにレベルが上がるが、食らい付いていきたい」と抱負。また今季アシスト王となった橋岡尚選手(同)は「昨年よりも攻撃のレパートリ

ーが増え、今季は1部で戦える自信をつかめた。まずはしっかり残留する」と力を込めた。

同大で2014年から指揮を執るのは、J1カンパ大阪にも所属経験のある岡村真城監督(45)。近年は昇格と降格を繰り返しており、1部定着が当面の課題だ。1部では新潟医療福祉大や新潟経営大など県内のライバルともしのぎを削る。岡村監督は「今季は若い戦力に加え、

4年生もチームのために動くなど全体として成長できた1年だった。上のレベルでも戦えるよう今からチームづくりしていく」と語った。

◆日本酒の歴史、文化が 産大の柏崎学 フレンチとのコラボも

# 日本酒の歴史、文化が

## 産大の 柏崎学 フレンチとのコラボも

新潟産大附属柏崎研究所(春日俊雄所長)が市内新橋の原酒造、宝町のザ・シヤンカーラの2会場で第5回柏崎学シンポジウムを開いた。「暮らした地域を豊

かに結ぶために」のテーマで、地元柏崎の歴史と文化の拠点となっている酒蔵の魅力を学んだ。

シンポジウムは、2回シリーズの第1回目。12日は最初に原酒造で「蔵元シン

ポ」を行った。金桶光起・県醸造試験場場長が「日本の歴史・本県の醸造・原酒造株式会社」の演題で基調講演。続いて原吉隆・原酒造社長と金桶場長、小早川陽青・フードコーディネーター(フレンチの鉄人)が小林健彦・新潟産大教授の司会で酒造り談義を行った。

金桶場長は、日本で唯一の県立の清酒研究機関である新潟県醸造試験場の目的を説明。続いて日本独自に

発達した日本酒の歴史に触れながら「日本酒は濃醇辛

口から淡麗辛口へと変わってきている」とした。新潟県は、酒造業と新潟大学、醸造試験場がトライアングルの構造で強みに「日本酒学」を発展させてきているという。

「酒造り談義」では、原

社長が火災や中越沖地震を乗り越えてきた200年を超える社歴を披露。続いてパネラーが「伝統産業にあっても進取の気風が大切」(金桶さん)、「海外への普及のためにはさまざまな飲み方の工夫も」(小早川さん)などと話題を展開した。

第2部の「文化体験」では、ザ・シヤンカーラに移動した。小早川さんが選んだ4銘柄の原酒造の酒とフレンチ料理のコラボを参加者約20人が満喫した。この途中では、小早川さんから酒の新しい飲み方も教わり、参加者の関心は上々。春日所長は「柏崎の食材を使った料理、地元産の酒のコラボの未来に大きな期待」と話した。

第5回柏崎学シンポジウム基調講演を行った金桶光起・県醸造試験場場長(市  
内新橋、原酒造



時半)午後5時15分。問い  
合わせは同センター(電話  
24・2148)へ。

◆日本地域学会 江口准教授が大石泰彦賞  
新潟産大 論文「NIMBY」で



江口准・産大准教授

# 日本地域学会 江口准教授が大石泰彦賞 新潟産大論文「NIMBY」で

新潟産大の江口准教授(57)が、日本地域学会の2022年度第31回大石泰彦賞(論文賞)を受賞した。

江口准教授は「歴史ある賞

をいただき、大変名誉なこと」と話した。

この賞は日本地域学会元会員の故大石泰彦氏の学会における業績と貢献を顕彰し、優れた論文に贈られる学会賞で1992年創設。江口准教授の論文は「NIMBY(ニンビ)についての簡単なゲーム理論的分析」。20年にア

シア太平洋地域の英文学術誌に掲載後、他の学術誌に5件以上引用されている。

ニンビは英語の句「我が家の裏庭には置かないで」の略語で、迷惑な施設の建設に反対する住民や運動を指す。対象となるのは原発や米軍基地、廃棄物処理施設など。論文はニンビ

「争議が「起きる・起きてこない」の違いを、平易なゲーム理論の枠組みを用いて説明する。

江口准教授は「柏崎から論文を世の中に送り出すことができたこと、それが大きな賞をいただいたことは、長年、新潟産大に勤務し、柏崎の地で暮らしてきた一員として、深い喜びとともに感謝している」と述べた。

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

芸術活動を通じ地域創生の試み

～大地の芸術祭訪問～

# 「新潟県東区」 地域に学び 地域をおこす ー実践活動レポートー

## 芸術活動を通じ 地域創生の試み ー大地の芸術祭訪問ー

2年生の地域理解ゼミ  
ナールⅣ(地域経済政策  
分野担当・青木隆明)で  
は、フィールドワークと  
して「大地の芸術祭 越後  
妻有アートトリエンナー  
レ2022」の企画展示  
のある、まつだい農舞台、  
越後妻有里山現代美術館  
M o n e t、そして清津  
峡溪谷トンネルを訪問し  
た。

されている。新潟県十日  
町市を中心とした山間  
部の妻有郷一帯に今回  
も現代アート作品が散  
りばめられ、この広大な  
地域の多くの集落の人  
々や企業が参加し、自然  
と芸術のコラボによる  
文化と地域経済の創造  
を試みる。

今学期の私たちのゼミ  
のテーマである「文化や  
芸術を地域経済・経営の  
観点から考える」ため  
にも一つの有意義な機会  
となった。経済学的な観  
点からは公共資本として  
役割をもち、そして研究  
開発への投資と同じよう  
に、地域の企業にとつて  
も存立の基盤となりう  
る。

しかしながら、当然そ  
れだけでは文化や芸術の  
素晴らしさや意義のすべ  
てを言い尽くしている  
は言い難い。昔、ヨーロ  
ッパの片田舎の教会で聴  
いたモーツァルトのレク  
イエムやビバルディの四  
季の市民コンサートの様  
子がふと蘇(よみが)っ  
てきた。人々にとつて芸  
術や科学は「経済」以前  
にそこにあつて当たり前  
の空気のようなものであ  
り、大地にしっかりと根付  
いた草木であり、そして  
花である。芸術祭とはそ  
の根付きの状況確認であ  
り、そして将来への継続  
の意思表示なのだと思  
った。

大学での授業の際には  
おとなしくあまり自分  
の意見を言わない学生たち  
も、この妻有郷の豊饒  
(じょう)な自然とシヤ  
ープで色彩的な現代ア  
ートが織り成す独特な融  
合、不思議な雰囲気に触  
発されたのか、時折みせ  
る素の表情がなかなか生  
き生きとしてチャーミン  
グであつた。今回の訪問  
が将来の新潟を支える若  
者たちにとつても一つの  
きっかけとなる一日であ  
つたことを願う。

経済学部准教授・青木  
隆明  
(同大学地域連携センタ  
ー)



この芸術祭は2000年より3年ごとに開催

(7) 2022年11月30日(水)1面 掲載

◆産大レクチャー ア・ラ・カルト<182>

「12世紀の気候変動」小林 健彦 経済学部教授

# 産大レクチャー ア・ラ・カルト <182>

「12世紀日本の気候変動と気象観」『天變類示、凶事間聞(てんべんはしきりにしめし、きょうじのあいだをきく)』とは何か？」

これは先日行われた「第65回全国歴史学大会 大韓民国 生態環境史学会分科発表」における筆者の招待発表テーマでした。10月29日の土曜日、新潟産業大学よりイン

ターネットZoomを使用した。日本からは私が招待発表を行いました。会場校は延世大学(ソウル特別市西大門区新村)でした。本来であればソウル市まで出張しなければならなかったのですが、新型コロナウイルス感染症がまだ収束してはいなかったため、柏崎市からの参加です。終了したのは17

時過ぎでしたが、その約1時間半にはソウル駅を挟んだ反対側にある梨泰院で事故は起こりました。学会関係者が巻き込まれていないことを祈

私は藤原定家の私日記である「明月記」等の古記録類を素材としながら、この時期における気候変動に関して検証を行いました。結論は夏季

超熱帯のような状態であったと考えられます。そのなると蚊媒介感染症(伝染病)―日本脳炎・デング熱・黄熱・チクングニア熱・ウエストナイ

(熱病)によって死亡したとされます。ハマダラカ媒介のマラリア原虫が引き起こすマラリアに感染したとする見解が有力です。

ただ、当時の人々の間では「天文の異変」▽気象現象」とする思想がありました。地上で発生する種々の気象現象とは、天文の異変が具体的な形として示されたもの(言わば人々に対する天帝よりの意思表示、懲罰)であるとした考え方です。それ故、気象現象に対し

## 12世紀の気候変動

のみです。

さて、12世紀の日本と言えはまさに「鎌倉殿」の時代の始まりですが、気候的には現在の日本と似ており、極端な気候に悩まされていません。

における暑熱の状況がすさまじかったらしいという事です。この時期はロットネスト海進期(平安海進期)と言われる温暖期の末期に当たり、日本の夏はほとんど

ル熱・シカウイルス感染症以上、ウイルス疾患、マラリア(原虫疾患)等がごく普通に流行し、平安時代末期の武将平清盛(1118~1181年)も高熱を発する感染症

てはそれ程の関心があつた訳でもありません。それにもかかわらず、実際に被災したのは異常高温、水不足、辻風(竜巻)、落雷、降雹(ひょう)、人口移動を伴うような極端な降水・浸水被害といった気象現象によるものだったのです。今後、日本も再度この様な状態に突入して行かないとも限りません。

(経済学部教授) 毎月1回掲載